

# グノーシス主義と模倣の神話論理

大田 俊寛

本論考<sup>(1)</sup>の主題は、「模倣」という概念を中心としてグノーシス主義の神話を分析することである。古代末期地中海世界に発生した「グノーシス主義」と称される一連の宗教思想的運動は、その周囲に存在したさまざまな宗教的・哲学的思想から種々のモチーフを剽窃することによって成立している。先行研究においてそれは「ヘレニズム的混淆主義」の一形態として（一種消極的に）理解され、グノーシス主義の起源や原型を確定しようとする努力が続けられてきた。これにたいして本論考では、グノーシス主義における「模倣」概念をその積極的原理として捉えなおし、グノーシス主義が模倣によって神話を創作するとはそもそもどのようなことかという基本的問いを改めて問い直すことを目的としている。

## 1. プラトン主義哲学における形而上学的模倣概念の展開

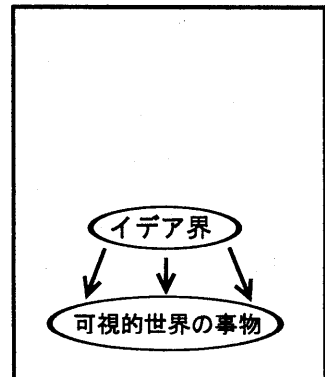
グノーシス主義の諸神話において、人間は神に似せて造られ、可視的世界は天上世界に似せて造られたとされており、その世界理解の基本線には「模倣」という概念が据えられている。とはいえグノーシス主義は、その「模倣」概念を独創的に編み出したのではない。むしろグノーシス主義は、プラトン主義哲学において形成されていた形而上学的世界観とその模倣概念を剽窃し、それに転回を加えることによって、みずからの神話論理を形成させていると考えることができる。

ここではまず最初に、プラトン主義哲学の形而上学的世界観においてその模倣概念がどのように展開していったのかを確認する。とはいえグノーシス主義の時代（紀元後二～三世紀）に至るまでのプラトン主義哲学の歴史はきわめて複雑な経路をたどっており、それを具体的かつ詳細に検討していく余裕はない。そこでここでは、プラトン主義哲学の展開を大きく三つのステップに分割し、簡略的に形式化して描写することを試みる。

### step.1 形而上学的写像理論。イデア界の模倣によって創造される可視的世界

プラトンの『ティマイオス』はその後期の著作と考えられている対話篇であるが、ここでプラトンは可視的世界が創造される様子を描き、その哲学的世界観を完成させようとした。プラトンはティマイオスに次のように語らせている。

もう一度先の問題に帰って、次のことを宇宙について考えなければなりません。つまり、宇宙の構築者は、モデルのうちのどちらのものに倣って、この宇宙を作り上げたのか。同一を保ち、恒常のあり方をするものに倣ったのか、それとも、生成したものに倣ったのかということです。さて、もしもこの宇宙が立派なものであり、製作者（δημιουργός）がすぐれた善きもので



あるなら、この製作者が永遠のものに注目したのは明らかです。[...] 宇宙は、言論と知性によって把握され同一を保つところのものに倣って、製作されたわけなのです。(2)

プラトンは世界の最上部に位置する永遠不動の理性の対象を「イデア界」とし、さらに、この世はイデア界の「似像 (εἰκὼν)」として存在すると捉えた。ここに、プラトンの世界観においてもっとも基本的なものである「可視的世界は (デミウルゴスによって) イデア界の秩序を模倣して創造された」という命題が形成される。

### step.2 自己思惟によってイデアを生み出す神。否定神学の形成

プラトンはその著作において体系的な「神学」を構築することはなかったが、プラトンに続く中期プラトン主義の哲学においては、とくにアリストテレス形而上学 (およびそのイデア論批判) の影響を受けて(3), 「神とは何か」という問題について積極的に語られている。中期プラトン主義者の代表的人物の一人であるアルピノス (二世紀中頃) は(4), 神とイデアの関係について次のように述べている。

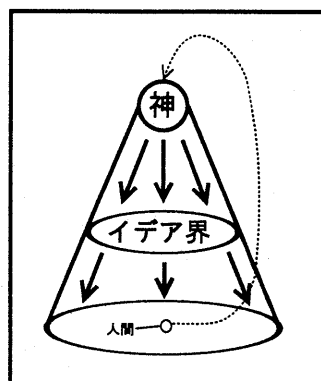
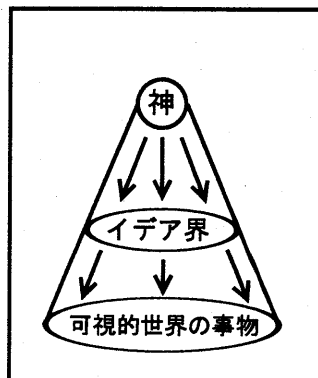
彼 (=神) は宇宙全体の知性に永遠に活動を可能ならしめている原因者である。彼は自らは不動のままこの知性に働きかける。[...] さて、第一の知性 (=神) は最も優れたものであるのだから、その認識対象も最も優れたものであるとしなければならない。ところが、この知性より優れたものは何もない。従って、この知性は自分自身と自分自身の思惟を永遠に思惟するということになるだろう。そしてこの知性のこの活動こそがイデアなのである。(5)

第一の知性である神は「不動の動者」であり、自己を対象として思惟することによってさまざまなイデアを産出させ、それによって世界全体を活動させる。さらに神とは、あらゆる<sup>positive</sup>実体的属性 (=個々のイデア) を超越した存在であり、それゆえにその性格は、あらゆる属性を否定する「<sup>negative</sup>否定神学」によって描かれることになった。

### step.3 神と人間の本質的同一性。プロティノスの神秘哲学

新プラトン主義者のプロティノス (三世紀) は、プラトン哲学の体系を二つの点において大きく展開させた。その一つは、究極的「一者」の絶対的超越性の確保である。プロティノスは、それ以前のプラトン主義哲学において否定神学の成立以後もかろうじて許容されていた、至高神にたいするさまざまな属性 (善, 存在, 自己思惟する者, 等) を拒絶し、「一者 (τὸ ἓν)」という呼び名以外のものを許さなかった。そして一者以外の万物は、そこから流出したものとされた。

さらにプロティノスが主張するのは、神と人間の本質的同一性である。至高神の超越性が高まることによって可視的世界に位置する人間と神の距離はいっそう遠ざかることになっ



たが、プロティノスの神秘主義において両者は逆説的に同一化する。

そうすると、あらゆる外物から身を引いて、内部への全面的転向を必要とすることになる。すなわち外物のいかなるものへも偏倚することなく、万事何ごとについても関知することなく、それも初めは心構えだけのものであったのを、今は形相の点までも知らぬということを押しすすめて、ついにかのものの直観のうちに自分自身を忘れるところまで行かなければならぬ。そしてかのものに合体して、いわばそれとの交わりのごとき者を十分に尽くした後に帰ってきて、もしできることなら、他の者にもかしこにおける合体交合の模様を伝えるようにしなければならない。(7) [...] かくて、もし自分がこのようなものになるのを視るにいたるならば、そこにひとは自己をかのものに似すがたとしてもつことになるわけである。そしてまたこのような自己をぬけ出して、いわば模型に対する原型のごときものへと歩を移して行くとき、人は行程の目的をそこに完了したことになるであろう。(11) (6)

プロティノスのこのような思考は、プラトンが人間の生の目的(τέλος)として述べた「神と似たものになること(7)」を前提としており、多くの中期プラトン主義者たちもこの概念に従っている。しかしプロティノスは、人間は至高神の「似すがた」や「模型」であることを超え出て、その「原型」を認識し、一体化する必要があるという神秘哲学を展開した。

われわれは、プラトンから新プラトン主義まで、およそ七百年に及ぶプラトン主義哲学の複雑な歴史を三つの段階に形式化して概観した。最後に整理しておこう。

第一段階。プラトンは、可視的世界はデミウルゴスによってイデア界を模倣して製作されたとする命題を提出した。

第二段階。中期プラトン主義は、自己観照(自己模倣)によってイデアを創造する至高神を設定した。イデアを超越する至高神には、否定神学が適用された。

第三段階。新プラトン主義者であるプロティノスは、一者からの流出につぐ流出、あるいは模倣につぐ模倣によって展開する世界を構想した。それと同時に、<sup>コピー</sup>模型である魂が<sup>オリジナル</sup>原型である一者へと帰昇し、一体化するという神秘哲学を唱えた。

プラトン主義哲学の世界観において、「模倣」という概念はどのような性質をもっているか。プラトン主義の描く世界は、模倣概念を基軸として展開し、集束する。可視的世界はイデア界の模倣によって成立しているゆえに「美しく善いもの」として存在するのであり、人間の魂は至高神の刻印を有するゆえに至高神との神秘的一体化に与ることができるのである。模倣概念によって形而上的世界と可視的世界(あるいは神と人間)は有機的に結びつけられ、統一的な全体性と位階秩序を構成している。

## II. 『ヨハネのアポクリュフォン』と模倣の神話論理

### II-1. 『ヨハネのアポクリュフォン』のプロット

われわれの次なる課題は、以上のように形式化されたプラトン主義の模倣概念を前提として、その形而上学的構造がグノーシス主義の神話にどのような仕方であらわれているかを考察し、両者の共通性と差異性を明らかにすることにある。とはいえず初めに、必要最低限度のレベルで『ヨハネのアポクリュフォン』(The Apocryphon of John, 以下A)と略す)の神話のプロットを要約し、これを整理しておこう。

## plot.1 否定神学によって描かれる至高神

プラトン主義哲学の体系における至高神と同じく、グノーシス主義の至高神は可視的世界やイデア界（グノーシス主義では後に見るようにプレーローマ界と呼ばれる）を超越した存在であり、あらゆる属性を否定した否定神学によって描写される。至高の存在とは、見えざる霊、不滅性の中に在る者、いかなる視力でも見つめることのできない純粹なる光の中に在る者、欠乏を知らない者、あらゆる者に先立つ者、断定し難い者、記述し難い者、身体的でも非身体的でもない者、大きくも小さくもない者、etc...である。

## plot.2 至高神の自己観照によるバルベローの発出

至高神は「霊の泉」に映る自己の姿を見つめることによって、最初の思考であり、自己の似像（＝鏡像）であるバルベローを発出する。至高神自身が、不定形であり、限定を持たないものであるのにたいして、その似像であるバルベローは限定と形相を有する。形而上学的鏡像段階を経て、至高神の意識の世界は秩序化が進行していく。

霊の泉が、光の活ける水から流れ出て、すべてのアイオンとあらゆる形の世界の支度をした。彼は自分を取り巻く純粹なる光の水の中に彼自身の像を見たとき、それを認識した。すると彼の「思考(ἔννοια)」が活発になって現れ出た。[...]これがすなわち万物の完全なる「プロノイア(πρόνοια・予見, 摂理)」, 光, 光の似像, 見えざる者の影像である。それは完全なる力, バルベロー, 栄光の完全なるアイオンである。(8)

## plot.3 バルベローによるプレーローマ界の創造

バルベローは至高神の承認を得ながら、さまざまなアイオン(αἰών・時)たちを生み出し、プレーローマ界を創造する。それらは「不滅性」「真理」「叡知」「言葉」「賢明」「愛」等と名づけられており、プラトン主義の体系における「イデア」に相当する。それぞれのアイオンは、男女の対を持つものとして配置されている。

## plot.4 ソフィアの過失とヤルダバオートの誕生

「ソフィア(σοφία・知恵)」と呼ばれるアイオンは、プレーローマ界の最下層に位置するアイオンである。ソフィアは、自分も一つのアイオンであるという理由で、至高神と同じように自分自身の影像を発出したいと願う。

さて、われわれの仲間なる姉妹、すなわち「ソフィア」は——彼女(もまた)一つのアイオンであったので——自分の内からある考えを抱くに至った。彼女は霊の考えと「第一の認識」によって自分の中から自分の影像を出現させたいと欲した。彼女のこの考えは無為のままではなかった。そして彼女の業が不完全な形で現れ出た。その外貌には形がなかった。というも、彼女は彼女の伴侶なしに(それを)造り出したからである。(9)

ソフィアが流産したものは次第に形をとり、蛇とライオンの外貌を呈する<sup>(10)</sup>。ソフィアはアイオンたちに見られることがないようにこれをプレーローマ界の外に投げ捨て、それに玉座を与えて「ヤルダバオート」と名をつけた。

## plot.5 ヤルダバオートによる可視的世界の創造

ヤルダバオートはプレーローマ界の外部で可視的世界を創造する。最初に創造されるのは、恒星天や惑星天の星々と同一視される「アルコーン(ἄρχων・支配者)」たちである。ヤルダバオー

トは、プレーローマ界を模倣して可視的世界を創造する。

さて、彼はこれらすべてのものを、すでに成立している第一のアイオーンの像に従って、整えた。それは彼らを不朽の型に倣って造り出すためであった。彼が不朽なる者たちを見たからではなく、むしろ彼の中に在る力——それは彼が彼の母親から受け取っていたものである——が彼の中に美しき秩序の像を生み出したからである。(11)

ヤルダバオートは旧約聖書の創造神であるヤハウエと同一視されている。ヤハウエは自分の創造した世界を見て、アルコーンたちに誇って語る。「私こそは妬む神である。私の他に神はない(12)」。

#### plot.6 人間の創造

ヤルダバオートの無知と傲慢にたいして、プレーローマ界のバルベーローは「人間と人間の子が存在する」と答えて反駁し、自分の形を立像によって現わす。ヤルダバオートとアルコーンたちは、水の中に映ったバルベーローの影像を目撃する。彼らは、「われわれは神の像と外見に従って人間を造ろう(13)。彼の像がわれわれにとって光となるために」と語りあい、バルベーローの立像を模倣しつつ、人間の(心魂的)身体を創造する。

最初の人間は「アダム」と名づけられるが、立ち上がることができなかった。プレーローマ界の諸勢力はヤルダバオートに、ソフィアに由来する力である「氣息(πνεῦμα)」を吹き込むようにそそのかす(14)。こうしてアダムは力を得て立ち上がるが、ヤルダバオートはそれを喪失する。光り輝くアダムを見てアルコーンたちはそれを妬み、物質世界の底(=エデンの園)へと彼を幽閉した。

#### plot.7 「生命の霊」と「模倣の霊」の対立

バルベーローは幽閉されたアダムとソフィアに由来する力を憐れんで、これに助け手を与えた。それは「善なる、憐れみに富む霊」であり、「ゾーエー(ζωή・生命、すなわちエヴァ)」と呼ばれる。これが人間をプレーローマ界へと導く「生命の霊」である。

これにたいしてヤルダバオートとアルコーンたちは、アダムに物質的身体と「模倣の霊(ἀντιμιμον πνεῦμα)」を与える。物質は「暗闇の無知」、「身体の小しえ物の洞窟」を意味し、「模倣の霊」は「忘却の鎖」を意味している。「生命の霊」の姿を擬態している「模倣の霊」は忘却の鎖によって人間を縛りつけ、人間を永遠に物質世界へ幽閉しようとするものである。

これ以降の記述では、「生命の霊」と「模倣の霊」の対立を基軸として、エデンの園以降の創世記の記述が再解釈される。アダムの内部に到来した「エヴァ」は「生命の霊」であるが、ヤルダバオートはアダムを眠らせてこれを捕らえようとする(15)。「生命の霊」は難を逃れるためにアダムから離れ、ヤルダバオートは「生命の霊」を模倣して女性のエヴァを創造し、アダムに「模倣の霊」に由来する性欲を植えつけたのだった。「模倣の霊」にしたがって性欲によって人間を増やすことは、ヤルダバオートの戦略であり、それによってプレーローマに由来する力は分散させられると考えられている。

人間に期待されていることは、「模倣の霊」を避け、「生命の霊」にしたがって生きることである。世界の終末においては、「プロノイア」であるバルベーローが到来し、物質世界の闇を照らして、ヤルダバオートたちが作り上げた宿命の鎖を打ち壊すとされる。

II-2. 模倣の連鎖とソフィアの過失

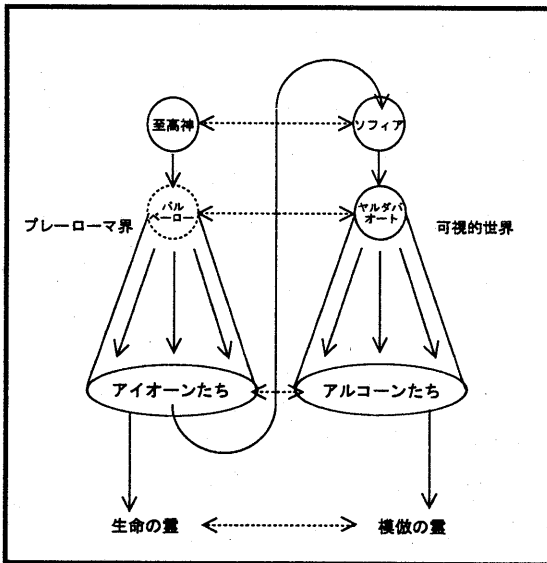
われわれは一章での考察において、プラトン主義における模倣概念の展開を三つのステップに分割して形式化した。グノーシス主義の神話であるA Jはプラトン主義における模倣概念を自らの体系に吸収していると考えられるが、それを一つずつ確認してみたい。

まず step1 に関して。プラトンのデミウルゴスは、イデア界を模倣して可視的世界を創造した。同様にA Jのデミウルゴスであるヤルダバオートは、プレーローマ界を模倣して物質世界を創造している。

次に step2 に関して。プラトン主義の神は自己思惟によってイデア界を創造した。A Jにおいても、その至高神は自己思惟 (= 自己観照) によって第一のアイオンであるバルベーローを生み出し、プレーローマ界を創造した。

最後に step3 に関して。新プラトン主義者のプロティノスによると、人間は神の似像であり、その内部に神的本質を有している。A Jにおいても、人間はバルベーローの影像を模倣して造られた者であり、プレーローマ界、ひいては至高神に由来する神的力量を有している。

以上の整理によって確認できるように、A Jはプラトン主義的世界観の骨格をその内部に吸収している。とはいえ、A Jの世界観とプラトン主義的世界観のあいだにはあまりにも明確な質的差異があり、われわれは両者を同一視することはできない。それでは両者の世界観の差異は、いったいどのような仕方でも生み出されているのであろうか。それを考察するために、A Jがその創世神話を構築するに際してきわめて大きな役割を果たしていると思われる特徴について、二点を指摘したい。



『ヨハネのアポクリフオン』における  
「光の世界」と「闇の世界」対応

まず第一に指摘すべきことは、A Jにおいてその模倣概念が執拗なまでに反復して用いられていることである。その部分のみに焦点を当て、物語をたどってみよう。至高神は自己を見つめ、自己を模倣して、バルベーローを初めとするアイオンたちを生み出す。そして、もっとも下位なるアイオンであるソフィアは、至高神の行いを模倣して(そしてそれに失敗して)ヤルダバオートを生み出す。ヤルダバオートはプレーローマ界を模倣してアルコーンたちを生み出し、可視的世界を形成する。アルコーンたちは、水に映ったバルベーローの影像を模倣して、最初の人間アダムを創造する。プレーローマ界の勢力は、アダムの助け手として

「生命の霊」を派遣するが、アルコーンたちは「生命の霊」を擬態した「模倣の霊」によってそれに対抗するのである。A Jの世界創造の神話は、語りえないほど崇高な至高神の自己模倣から出

発して、「模倣」の概念を執拗に反復し、あたかも緻密な襷を織り上げていくように、下方の世界が生成していく姿を紡ぎだしている。

第二に指摘しておくべきことは、「ソフィアの過失」というプロットが物語全体にたいして果たしている機能の重要性である。A Jにおける模倣の論理の連鎖は、ソフィアが登場するまでは落ち度のない過程として連続的に行なわれている。プレーローマ界は、語りえぬ至高神、その似像（＝鏡像）であるバルベーローを頂点として、統一のとれたヒエラルキーを形成するとされている。しかし「ソフィアの過失」は、物語の展開を大きく変化させる。ソフィアは至高神の働きを模倣し、自己の姿を見つめ、自己を模倣することによって新たな存在を生み出そうとした。しかし言うまでもなく、ソフィアはあくまで至高神とは異なる存在なのであり、彼女はまさに自分の姿を見誤るということになったのである。このような意味において、ソフィアは「偽りの至高神」である。その意図は必ずしも悪しきものではなかったが、ソフィアは至高神を模倣し、その地位を不当に占拠しようとした。コピーがオリジナルに取って代わろうとするというこのような天界の不祥事にたいして、プレーローマ界はソフィアを追放することによって対処せざるをえなかったのである。

自己の姿を見誤ったソフィアはそのゆがんだ鏡像を流産することになり、造物主ヤルダバオートはプレーローマ界のヒエラルキーから明らかに逸脱した存在として登場する。ヤルダバオートはプレーローマ界の外部で、バルベーローがプレーローマ界を創造した方法を模倣反復し、可視的世界を創造していった。

A Jが語る創世神話では、「ソフィアの過失」という事件を転換点として、異なるヒエラルキーをもつ二つの世界が拮抗して存在している。そして、その物語において模倣概念が異常に増殖するのは、このような世界観の基本的構造に起因すると考えることができる。それはどのような理由によるのか。

プラトン主義的世界観におけるように、世界全体が統一的なヒエラルキーに収まると考えると、そこで展開される模倣関係は基本的に単一の性質を帯びる。すでに見たように、そこではヒエラルキーの下位のものが上位のものを模倣し、その秩序に倣うとされるのである。しかし、A Jのように二つのヒエラルキーが拮抗することになると、そこで展開される模倣関係は単純なものとはなりえない。確かにプレーローマ界の内部では、上述のようなプラトン主義的模倣関係が維持されている。しかしヤルダバオートの模倣行為は、プラトン主義的なそれと性質を異にする。ヤルダバオートはプレーローマ界を模倣するが、彼はそのヒエラルキーに所属しない。ヤルダバオートは模倣によって世界を創造しながらも、その原型の存在と価値序列を無視し、独自のヒエラルキーを形成しようとするのである。こうしてヤルダバオートはプレーローマ界の神々を無視し、「私の他に神はない」と語ることになる。

しかしプレーローマ界の勢力にとって、自己のヒエラルキーに属さない模倣物は偽りの像であるということになるだろう。プレーローマ界は可視的世界の偽りの像（虚像）にたいして、真の像（似像）を提示しようとする。こうして二つのヒエラルキーは、とくに人間がどこに帰属するかということをめぐる、模倣物の抗争を繰り広げることになるのである。彼らは自分たちが「原型」であることを主張しあい、互いに証拠物件を提出しあう。A Jの物語で模倣概念が異常に増殖するのは、このような事態に起因している。

## III. 似像と虚像の対立——プラトン主義からグノーシス主義へ

すでに見たように、プラトンは『ティマイオス』において次のように言っている。「宇宙は、言論と知性によって把握され同一を保つところのものに倣って、製作されたわけなのです。」すなわちプラトンによると、可視的世界はデミウルゴスによって、イデア界の善き「似像」として作られた。イデア界の似像である可視的世界は、<sup>コピー</sup> 範型であるイデア界にたいして忠実であり、そのヒエラルキーに所属する。プラトンは『ティマイオス』での創世説において、可視的世界が基礎的に「似像」の論理によって製作されたということを主張する。

これにたいしてA Jでは、造物主ヤルダバオートはソフィアの過失によって、プレーローマ界のヒエラルキーから疎外されたものとして誕生した。彼はプレーローマ界を妬む。ヤルダバオートはプレーローマ界を横目で眺め、その像を模倣して可視的世界を創造しながらも、「私の他に神はない」という虚言を吐くのである。

一言で簡単に言えば、プラトン主義の可視的世界がイデア界の秩序につらなる「善き似像」であるのにたいし、グノーシス主義のそれは<sup>オリジナル</sup> 原型の剽窃によって形成される「悪しき虚像」だということになる。プラトン主義とグノーシス主義のデミウルゴス（創造神）を比較してみても、その機能自体はほとんど変わらない（どちらのデミウルゴスも、形而上的世界を模倣して可視的世界を創造する）。しかしそれでも、グノーシス主義のそのみが悪しき存在として描かれるのはいったいなぜだろうか。それはヤルダバオートの模倣行為が、著作権法を遵守しない「違法コピー」のようなものだからである。プレーローマ界の秩序に所属しないヤルダバオートは、プレーローマ界から<sup>copyright</sup> 著作権＝模倣する権利を与えられていない。またヤルダバオートも、その著作権がもとも自分に属するものであることを主張し、正当な著作料を支払おうともしない。

グノーシス主義は、プラトン主義がその創世説から徹底的に排除しようとした「虚像の模倣」を積極的に導入する。グノーシス主義における「悪しき虚像」としての世界は、<sup>オリジナル</sup> 範型の世界の特権的地位をおびやかす、それと対立する。精巧に模倣された虚像としての世界は、オリジナルとコピーのあいだに存在するはずの序列と境界を侵犯するのである。

グノーシス主義的世界観においては、天上世界に由来する真の像と物質世界に由来する偽りの像、あるいは真理を反映した言葉と外見だけが真理に類似した偽りの言葉が判別困難なままに混在している。そしてそれゆえにグノーシス主義は、すでに存在する思想や宗教、およびそのテキストにたいして、虚偽を廃した真理を再構築する必要があると考えたのだった。モチーフの剽窃による神話の再製作というグノーシス主義の思想的形式は、その神話に描かれている思想的内容と密接な連関を保っていると見る事ができる。



註

- (1) 本論考は、東京大学大学院提出の修士論文「グノーシス 模倣の神話論理」第一章および第二章を要約して作成したものである。
- (2) 『ティマイオス』29A (『プラトン全集 12』種山恭子訳, 岩波書店, 1975)。
- (3) アリストテレス『形而上学』第十二巻第七章 1072b.18 を参照せよ。
- (4) 中期プラトン主義とは、紀元前5世紀のプラトン自身の哲学と、紀元後3世紀のプロティノスやプロクロスに代表される、いわゆる「新プラトン主義」との中間に位置づけられるプラトン主義的潮流を指す。ここで扱う『プラトン哲学要綱』の著者であるアルピノスは、正確な生存年代は定かではないが、149年から157年の間に医師であるガレノスがスミルナで彼の講義を聴講したと言われている。プラトンの注釈書数点を著したと伝えられるが、『プラトン哲学入門』(*Eisagôgê*)と『プラトン哲学要綱』(*Didaskalikos*)の二書が現存している。
- (5) *Didaskalikos*.164.19-31 (大貫隆訳, 未刊行)。
- (6) 『エンネアデス』VI.9「善なるもの一なるもの」(『プロティノス・ポリュビュリオス・プロクロス』田中美知太郎訳, 中央公論社, 1980)。
- (7) 『テアイテトス』176B。
- (8) A J § 12-13 (『ナグ・ハマディ文書 I 救済神話』大貫隆訳, 岩波書店, 1997)。
- (9) A J § 26。
- (10) このようなヤルダバオートの形象は、ミトラ教における時間神、クロノス神のそれを剽窃したものと推定される。フランツ・キュモン『ミトラの密儀』小川英雄訳, 平凡社, 1993, 八六頁を参照せよ。
- (11) A J § 40。
- (12) 『イザヤ書』45:5・『申命記』5:9 等からの引用だが、A J は旧約の創造神のこれらの言葉が相互に矛盾することに着眼し、ヤルダバオートがプレーローマ界の神々の存在を天使たちに向かって暗示したのとして再解釈されている。「なぜなら、もし他に神がないのならば、彼は一体誰に対して妬むというのか」(A J § 41)。
- (13) 『創世記』1:26。
- (14) 『創世記』2:7。
- (15) 『創世記』2:21。

## Gnosticism, the mythology of imitation

Toshihiro OHTA

This article analyzes Gnostic myths in light of the concept of "imitation." The religious movements of late antiquity, known collectively by the term "Gnosticism," were formed through the imitation or plagiarizing of various motifs from other religious and philosophical systems of that era. Previous studies of this topic begin with this notion and attempt to confirm the historical originality of Gnosticism, or seek to describe its original form. In contrast to such studies, I will specifically analyze the imitative characteristics found within Gnostic thought, and re-evaluate the fundamental motivations for the production of myth through imitation inherent within Gnosticism.